

一 提言

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23734

深 井 一 郎

昭和四五年三月五日「金沢大学教育学部国語国文学会」が結成され、同時に機関誌「金沢大学語学文学研究」が創刊された。以来今年まで二十年の歳月が経過した。初代の藤田会長が昭和四八年三月退官転出された後、今日までその仕事をお引受してきたが、丁度私も今年三月金沢大学を定年退官したことでもあり、学会創立二十年を機に、更なる飛躍を願って改めるべき点を再検討し、活力ある体質を創り出して、新たな一步を踏み出す必要があるのではなからうかと考え、ご挨拶に替えて筆をとる次第である。

会発足の当初は、かつて藩政時代には天下の書府と称せられ明治以降も多くの文人・学者を擁した金沢の地に、新制大学設立を契機として、地方に根付いた学界を造り上げようという意気込みがあり、大学内部には大学としての研究教育の質を一層高めるために大学院を開設しようとする気運が生れていた。会則では第三条に「本会は国語学・国文学・漢文学・書道ならびに国語教育に関する研究を進め、会員相互の研鑽を図ることを目的とする」と記されている。当時の状況の中で各分野における研究者中心の運営が進められたことは止むを得ないことであつたと言わざるをえないであろう。しかし、研究室の卒業生の大半が教師となり日々の教育実践の中で苦勞する実情に対して、援助しつゝ、実践の分析検討を通じて学会への参加を奨励して、教育研究の分野で学会を支える層の充実拡大に、それ程力を注いで来なかつた点は率直に反省しなければなるまい。

また初期には卒業生の中から研究者への途を歩み、現在立派に活躍している人もあるが、最近は大大学院も設けられて院生も年に数名は巣立つてゆくのであるが、自立した研究者として育てゆく可能性は少いのが現状である。当地在住の数に限りある研究者の相互研鑽を中心として、それが周囲に広がり学問的な雰囲気醸成し、人々に影響を及ぼしひいては地方に根付いた学界が生れると考へた出発であつたが、二十年の歳月を経て改めて振り返ってみるに、高齢化による研究者の減少はあつても当地に在住する研究者の数は増すことはなかつた。折角育つた卒業生の中の研究者たちも、遠く他地方に住み学会員とはなつても此地方での貢献は成し得ない状況である。一方、会発足時の卒業生は二七〇名といわれるが、現在では八百名に及ばんとしている。石川県を中心に北陸三県の国語科教育の担い手は、この卒業生たちの手に委ねられていると言つても過言ではなからう。是等の人たちへの関わりを大切に、会の在り方を考えることは、今では必要なのではないだろうか。

基礎的な学問の知識や広い教養など、また毎日必要な教材研究の具体的な在り様や、日々の授業の中で活用しうる授業研究など、卒業生たちの要望に応える活動を、学会の中心に据えることも現状では一つの案ではなからうか。勿論、研究者の面を打切るのではなく、あくまで追究する事は肝要である。この教育現場の要望に応える動向と、研究の質を高める所為とは必ずしも相反するものではなからうと考へられる。要は両者の均衡が現況に合うか否かにあるのではなからうか。約二十年、会の歩みに責任を負つてきた一老人の、この会が再び活力を取り戻し、多くの学究や教育者に支えられて、その存在意義を発揮してゆくことを願つての一提言である。